

加藤周一著

羊の歌

—わが回想—



岩波新書

689



加藤周一著

羊の歌

—わが回想—

加藤周一

1919年東京に生まれる

1943年東京大学医学部卒業

著書—「現代ヨーロッパの精神」

「芸術論集」「三題噺」

「日本人の死生観上,下」(共著, 岩波新書)

羊の歌 (全二冊)

岩波新書(青版) 689

1968年 8月20日 第1刷発行 ©

1978年 11月20日 第15刷発行

¥ 320

著 者 か と し い
 加 藤 周 一

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

目 次

祖父の家……………	一
土の香り……………	三
渋谷金王町……………	二六
病 身……………	三七
桜横町……………	四〇
優等生……………	六〇
空白五年……………	七一
美竹町の家……………	八一
反抗の兆……………	九三

二・二六事件	一〇四
駒場	一二五
戯画	一二六
高原牧歌	一三六
縮図	一四八
古きよき日の想い出	一六〇
ある晴れた日に	一六九
仏文研究室	一七九
青　　春	一八八
内科教室	二〇〇
八月一五日	二二三
あとがき	二三三

祖父の家

前世紀の末に、佐賀の資産家のひとり息子が、明治政府の陸軍の騎兵将校になった。日清戦争に従軍するまえに、家産を投じて、馬二頭と馬丁を貯え、また名妓万龍をあげて新橋に豪遊し、イタリアに遊学しては、ミラノのスカラ座にカルーゾがヴェルディやプッチーニを唱うのを聞いた。それが私の祖父である。祖父はそのとき西洋流の美衣美食と男女交際の慣習を、いくらか身につけてきたらしい。日露戦争の頃には、陸軍大佐となり、帝国陸軍のために軍馬を調達する目的で濠洲へ行った。戦後陸軍を退いてからは、貿易仲買の事業をはじめて、第一次世界大戦中にもうけ、その後の恐慌で資産の大部分を失ったから、晩年の生活はあまり豊かではなかった。

早くから佐賀県令の妾腹の娘と結婚していて、一男三女があった。長男は帝国大学医学部を卒業してまもなく死んだ。三人の娘のなかで、長女は学習院へ通わせ、後に佐賀の資産家の長男で政友会の代議士に嫁した。次女と末の娘は、雙葉高等女学校へ通わせて、洗礼までうけさせたが、それぞれ基督教徒ではない夫に嫁した。次女の夫、つまり私の父は、埼玉県の大地主の次男で、医者。末の娘の夫は、大阪の町家の出で、会社員であった。家産の傾きはじめる

共に、娘の結婚の相手方の資産の程度も、次第に小さくなったのである。代議士は、民政党内閣のときには、「浪人」をして、子分たちと自宅で酒を飲んでいたようだが、政友会が政権をとると、県知事になり、俄かに羽振りがよくなった。しかしそれ以上の権勢を得ないうちに、選挙の応援演説にいつて卒中に倒れた。医者は開業をしたが、成功をもとめず、従って成功もせず、ひっそりと渋谷で暮っていた。会社員は大いに出世を望んで、大阪で奔走していたが、その望みを果さぬうちに、肺結核で死んだ。この三人の娘輩たちは、没落の過程にあった祖父の家を、たて直すための役にはたたなかったようである。

第一次大戦の直後、一九一〇年代のおわりに嫁した三人の娘には、それぞれ孫ができていた。長女にはひとりの息子があり、後に外交官になった。次女には一男一女があり、それが私と私の妹である。末の娘にも一男一女があり、後にそれぞれ大学教授と会社員になった。

子供の私の記憶は、関東大震災の前にはさかのぼらない。私の覚えている祖父の家は、おそらく二〇年代の後半のことであろう、渋谷駅から青山七丁目へ向って宮益坂をあがり、坂の中頃の左手にあった。宮益坂の歩道からすこし退って、御影石の柱と左右にひらく鉄の扉を備えた門があり、門から両側に植込みのある砂利道がしばらく真直につづいていて、その奥に玄関がある。玄関といくつかの「洋間」は、明治大正の日本に多い英国のヴィクトリア朝様式をまねたつくりで、天井が高く、窓がせまく、重い革の肘掛椅子がおいてあった。壁にかけた鹿の角、虎の革の敷物、古風な切子硝子の行燈、エジプトのらくだの刺繍、パリの卓子掛——額縁

祖父の家

に入れたいくつもの馬の写真が祖父の経歴を示していたことを除けば、要するにどの旅行者でも西洋からもって帰りそうな品物が、古道具屋の店頭のようにならべられていたといつてよいだろう。そういう部屋に格別の用途はなかったらしい。祖父は祖母と書生と三人の女中と共に、その「洋間」の奥につづいた沢山の和室のいくつかを使って暮らしたのである。

子供の私には、祖父の家でおこっていることのすべてが、不思議な宗教的儀式のように思われた。居間の大きな机のまえに坐った祖父が、あごで指図をすると、祖母や二人の女中が——もう一人の台所にいる女中と書生が居間に姿をみせることは、ほとんどなかった——煙草やお茶や状さしを、うてば響くようにさし出す。食事の皿はむやみに沢山あり、それは必ずしもすべてを食べるためのものではなく、しばしば箸をつけただけで祖父が傍へ押しやるためのものであった。「こんなものが食えるか」というと、皿を庭へ投げけることもあったらしい。しかし私はいつも母について行ったので、そういう光景をみたことはなかった。私の母のいるところで、祖父はいつも機げんがよかったし、たとえ不機げんなことがあっても、それを露わにすることを控えていたようである。私はひとりの主人公の周りで、三人の女たち、祖母と二人の女中が怯えたように絶えず気を配っているのを眺め、それほど近より難い威力をそなえた主人公と談笑することのできる母にも、また無限の能力をみとめていた。たとえその能力の性質は、子供の私にはよくわかっていなかったとしても。

祖父が何かの用事で出かけようとするときに、その不思議な儀式は頂点に達した。起ちあ

がった祖父の大柄な身体に、小柄な祖母がより添って、二人の女中が、次々にさし出す下着や洋服を着せかける、折りたたんだ白い麻の手巾を胸にさし、大きな鏡をみながら、薄い髪をなまし、舶来の香水を、大きな瓶の頭についた金具から吹きかける。母がその様子をみながら、「お父様またおたのしみでしょう」などといい、祖父が香水をかける手を休めずに、冗談でそれに答えている間、祖母は女中を指図して、「お靴はそろいましたか、今日はそれではありませんよ、早くとりかえて……」などと大さわぎをしていた。なぜひとりの男が家から出かけるために、これほど多くの人が右往左往しなければならないのか、そのときの私には全くわからなかった。祖父は玄関で靴をはかずに、庭に面した縁側の踏石の上で靴をはく。そこからはすぐに庭へ降りることができ、庭の片隅に祀られた稲荷のまえに行つて、柏手を打つのは、その儀式のどうしても必要な一部だったからである。二人の娘をカトリックの女学校へ送った祖父は、神主をよんで冠婚葬祭を行っていた。しかし何かを信仰していたとすれば、自宅の庭の稲荷をいちばん信仰していたのかもしれない。

稲荷は少し低くなった木かげにあって、家の縁側からは見えなかったが、植込みの間の石段を辿って行くと、小さな朱塗りの鳥居があり、人の肩ほどに築かれた石の台の上に、その祠があつて、左右に石造の狐を配していた。大工の芸の手のこんだ細工であつたと思う。手入れはいつも行きとどいていて、供えものがあつた。家族のなかで、祖父のほかは稲荷を信仰している者は、ひとりもいなかったが、誰もが、徹底した無神論者であつた私の父でさえも、また子

供の私でさえも、祖父が稲荷について真剣であるらしい、ということは、知っていた。晩年の祖父は毎朝そして外出の度に、そこで商売の成りゆきや、家族の安泰や、またおそらくは愛していた女たちの身の上を、祈っていたのである。

祖父には女友だちが多かった。そのなかの一人は、西洋人で、私たちがいるときにも、祖父が電話に起って、フランス語でその婦人と話すようなこともあった。家族のなかにフランス語を解する者はいなかったから、それが商売の電話であるなどと、いいつくろっていたらしい。しかし私の母は、そういうことをすべて見抜いていて、「いくらおばあさんにわからないからといって、眼のまえて話をするのは、ひどいわ」といつていた。しかし母はその「おばあさん」にも批判をもっていなかったわけではない。「おばあさん」が眼のまえて別の女と話をされても、何のことだかわからないのは、言葉のためばかりではなく、そもそも知りたくないからなのだ、と母はいったことがある。「女遊びは男のはたらきである」と「おばあさん」は考えているのであり、それは、彼女が「やはり妾の子だ」ということに関係があり、しかし自分の見ているところでの電話についてはそれが商売の電話だと考えていたかった、というのである。私は祖父の相手の西洋の婦人に会ったことはない。しかし女友だちの一人には会ったことがある。

その頃西銀座に祖父は小さなイタリア料理店を経営していた。一階に酒場があり、そこからせまい急な階段をのぼると、二階で食事ができるようにになっていた。祖父は孫をつれてその店

へ食事に行くことがあった。「今日は家族連れだ」などといいながら、酒場の奥へ声をかけ、顔見知りの男たちと軽口を叩きあう。それはイタリア語かフランス語のやりとりで、抑揚が表情に富み、大げさな身ぶりを伴っていて、家で祖母や女中たちにとりかこまれ、母や私たちと話している祖父とは、全く別人に変わってしまったかのような印象をうけた。それが私には、すじのわからぬ芝居的一幕を眺めているようにみえた。芝居のなかの祖父と子供たちとの間にはつながりがない。二階へ通じる階段の上り口で、私は主人公が一瞬の間私たちの存在を忘れているということを知っていたし、私たちの役割がその短い一幕の見物人であるほかはない、ということも知っていた。

二階では料理店の女主人が待っていて、いくらかつくった華かな声で、「あら、お珍しい、どうぞ」などという。「お珍しいもご挨拶だな」「でもそうじゃないかしら……」「いや仕事が忙しくてね」「どんなお仕事でしょう？」と女主人はからかうように笑い、「それどころじゃないよ、昨日大阪から帰ってきたばかりだ」と祖父があらたまった声を出すと、急に調子を変えて、「あちらはいかがでございますか」「なに、相変らずだが……」「いつもそう仰言るだけね」と、いふべからざる媚を含んで——と私には思われた——睨む。女主人との祖父の一幕は、酒場の男たちとのやりとりとは、またちがう別の世界のものであった。そこには合言葉のようなものがあり、ひどく丁寧であるかと思えばにわかにはうちとける表現があり、その度に華やいだり沈んだりする気分があった。祖父とその婦人との関係が、祖母や私の母との関係とはちがう一種

の親密さの上に成りたっているらしいということを、私はただちに感じた。私はその親密さが一個の品物のように確実にそこにあるということ、しかしその品物の内部に外から入ってゆくことは全く不可能だろうということも感じていた。祖父と女主人の側からみれば、私と私の妹ともう一人の従兄とは、いつでも望むときに、二人のやりとりのなかへ引き入れることによって、話のすじ道を変えるための口実になり得るものであったろう。「まあ、立派なお子さんですこと」と女主人はいった。「冗談じゃない、孫だよ」「ほんとうにお子さんだとしても、誰だってそう思いますわ」——祖父にとってなぜ若くみえることが嬉しいのか私には想像がつかなかったが、女主人のお世辞をそれと知りながら、祖父がそれをよろこんでいる、という事実を、私はみとめ、そういう祖父に親しみを覚えた。稲荷に柏手を打ったり、イタリヤ人と冗談を言合ったり、格別悪事を働いたとも思われぬ祖母をどなりつけたりする全く不可解な人物にも、理解することのできる面がある、と私はそのときに思った。そしてその理解することのできる面は、他のどんな時でもなく、まさに祖父がその女友だちといるときにあらわれたのである。

私の父は祖父を好まず、その「放蕩」を非難していた。妻以外の女との交渉は、悪事のなかの最悪のものであった。カトリックの尼僧が経営する学校で育った母は「放蕩」を悪事とすることと父とちがわなかったろうが、そのことを非難するよりも、むしろ説明しようとしていた。もし祖父があれほど信頼していた長男を早く失うことがなかったら、その後の放蕩はおこらな

かつたろう、またもし祖母がことごとくに祖父の氣に逆らうような女でなかったら、家を留守にすることもはるかに少かつたはずであろう——罪を憎んでその人を憎まず。しかしそれは果して罪だったのであるうか。私はながい間私の知っていた祖父と「悪事のなかの悪事」とを、抱き合せて考えることに無理を感じていた。しかしその無理を意識していたのではなかった。いわんやその無理を解決するために、果して「放蕩」がいついかなる場合にも罪であるかないかを、みずからに問うていたわけではない。私は子供だった。私は一方で親から吹きこまれた罪の觀念をそのまま受け入れながら、他方では女友だちのいるときの祖父を、理解していなかったにしても、理解するかもしれないと予感していたにすぎない。予感が私のなかで実現したのは、はるか後になって、私自身がひとりの女の眼のなかにすべてをみ、その一刻が世界の全体よりも貴重だと思われるような瞬間を、経験した後でのことである。その経験は、事の善意について語ることを、全く無意味にみせる……私は祖父を想い出し、どうして彼がそれを知らなかったといえるだろうかと考えた。「放蕩」の語は、みだりにこれを人に冠しても、その人の多くを説明しないと思われる。その内容の人によって異なるのは、品行方正の良家の子女の生活の内容が、人によって異なるのと同じことであろう。しかし祖父の生活の内容を知るためには——たとえばそれが可能であったとしても、私とは年齢があまりにはなれすぎていた。祖父の「放蕩」はつまらぬものであったかもしれない、またそうではなかったかもしれない。ただそうであつたろうと想像する理由はないと、私は今考えている。私は一体こういう祖父の血をう

けついでいるのだろうか。しかしそもそも血統なるものを、私は、若干の遺伝的體質以外のことについて、全く信用しない。そういうことがあるかもしれないが、たとえあっても知ることができないとすれば、考えの上でそれを除外する他ないだろう。そういうことよりは、子供の私が、身の廻りに「放蕩者」といわれる人物をもっていて、その人物について、おそらく多くの失敗を想像することはできても、悪事を想像することはむずかしかったという事実には、意味があるにちがいない。

祖父は子供たちに対しては、寛大で、金ばなれがよく、いくらか気まぐれで、しかし一種の誠実さを備えていた。子供に対する約束でもそれを気軽に破るということはしなかった。たとえば、祖父がいつものように、何でも欲しいものを買ってやるといい出したときに、私が生きた馬を望んだことがある。祖父はおどろいて、生きた馬は売っていないといい、それはたとえ手に入れても子供に扱えるものではないといい、何でも欲しいものといったのは、店で買えるものならば何でもという意味であったといながら、真面目に説得の努力をつづけて倦まなかった。私は生きた馬よりも、小さな子供を相手に、何とかして説得しようと、どこまでも努力する祖父その人に感動した。私はその感動を、生きた馬の望みを固執することではしなめていた。

イタリア料理の味はすばらしかった。その店は私の知らぬ間に祖父の手をはなれて、今はあとかたもないけれども、私は今も東京のいわゆる西洋料理で、あれほどの味には出会わないよ

うに思う。それはおそらく子供の私が、その頃他にどういう味も知らなかったからかもしれない。しかし祖父はなんでも一流のものを好んでいたし、その意味で子供を差別することなかった。イタリア料理を成人に御馳走するのと同じように註文し、食卓の作法を私たちに教えた。通じても通じなくても、成人に話しかけるように、たとえば、映画館へ連れて行ったあとで、あの映画をどう思うか、などといった。その頃私は小学校へ通っていたにちがいないが、どう思うかといわれても、私にはそもそも話のすじさえわかっていなかった。妹は映画のなかの大きな泣き出し、私はあれは現実のことではなく画面の上の出来事にすぎないと絶えず自分にいいきかせることで、辛じて映画館の暗やみのなかの衝撃に耐えていたのである。祖父は映画について話しかけるときに、そういう私の側の事情を少しも理解していなかったように思われる。しかしその無理解が、祖父の側における相互理解への要求の、いささか唐突なあらわれであることも、たしかであった。私は祖父を不注意な人だとは思ったが、同時にその人柄に一種の魅力も感じた。後年の私ならば、ある女たちが祖父に惚れたとしても不思議ではない、とさえ考えたことであろう。

イタリア料理店には、子供の私にとっての「西洋」があった。それは酒場の男たちのためでもなく、祖父の外国語のためでもなく、微妙な——と私には思われたその料理の味のためであり、機げんのよい祖父がくちずさんだイタリア歌劇の詠唱の節のためであった。料理の味は、私の両親の家で味わうどんな味からもちがっていた。イタリアの節は、私が家庭で聞いた琴や

尺八の旋律からも、また小学校の唱歌からさえも、遠く隔っていた。そこには感覚の別の秩序があった。その秩序を私があらためて、その頃と同じ程度に鋭く感じたのは、二〇年の後、地中海の紫の潮と大理石の町をはじめ自分の眼で見てから後のことである。そのとき私は英国で、シティの古い事務所に、祖父の「洋間」の革の椅子を見出し、ローマの街頭に、祖父の酒場の男たちの言葉の抑揚や身ぶりを見出し、ザルツブルクの歌劇場で、客演のイタリアの歌手の唱う旋律に、祖父の口ずさんだ節のいくつかを想い出した。私ははじめて見た歐洲に、ながい間忘れていた子供の頃の世界を見出していた。西欧の第一印象は、私にとって遂に行きついたところではなく、長い休暇の後に戻ってきたところであった。しかしそれは第一印象にすぎないだろう。私はその後パリで暮し、その国の言葉を、おそらく祖父が話すことができたよりも自由に、話すようになった。子供の私にとっての「西洋」が「西洋」のどれほど小さな一部であったか、またそれが「西洋」の全体のどういうところに位置する部分であったか、ということも理解するようになった。私は、私の源の、源を知りはじめていた。

私は母と共に、またときには父とも連れだって、祖父の家を訪ねることが多かった。祖父の家は私たちのところから遠くなかった。私が親類の他の子供たちに会ったのも、ほとんどすべて祖父の屋敷のなかでのことであった。誰かの結婚式とか、その記念日とか、送別会とか、法事とか、祖父が親類をあつめるのに口実は沢山あり、そういう機会が来ることを私はたのしみにしていた。庭は広かったし、子供の遊び場に事欠くことはなかった。私は生籬の内側で親類

の子供たちと駆け廻っていたが、その生籬は、斜面の低くなったところにあり、生籬のすぐ下には低い石垣があって、石垣に沿うせまい道とその道に向って戸口をならべた長屋がつづいていた。長屋の人々——戸口のまえで赤ん坊をあやしている婦人や、道で石けりをしている私たちと同じ年頃の子供たちは、私たちとは別の世界に住んでいて、眼と鼻の先にながら何らの交渉もなかったし、そもそも交渉の可能性の想像もできないような人々であった。私はそのことを少しも不思議に感じていなかった。そのために私は、その長屋がすべて祖父のもち物であること、そればかりではなく宮益坂を上ってくるときに、左側にならんでいる小さな店のほとんど全部が、屋敷の門のすぐ下まで、祖父の貸家であることを知ったときに、異常な衝撃をうけた。長屋の人々と私たちの間には関係がなかったのではなく、祖父の差配が毎月家賃とりたてに廻る度に、直接の関係があったのである。ただ私は、その関係の内容を詳しく知らなかったし、その意味するところを知らなかったにすぎない。深い関係があって、しかも全く関係のない人々の存在は、私の解釈することのできないものであり、総じて明るく澄んだ私の空にのこされた大きな暗点であったといえるだろう。祖父の家へ行くたびに、長屋の人々をなるべく見ないようにする習性を、私はいつのまにか身につけていた。